



BSR 通信

BSR 推進室ニュースレター第 10 号

平成 27 年 1 月 10 日

発行：大正大学 BSR 推進室
〒170-8470 東京都豊島区西巣鴨 3-20-1
03-5394-3079 (直通)
bsr_lab@mail.tais.ac.jp

鴨台観音を慕う

大正大学 学長

勝崎 裕彦

目次

- 1 頁 : 卷頭言
- 2 頁 : さざえ堂だより
- 3 頁 : 研究ノート
- 4 頁 : BSR 図書室・今後の予定

平成 25 年 5 月 18 日に落慶開眼法要をした鴨台観音さざえ堂は、21 世紀の青春のキャンパスを目指す大正大学の新しいシンボルである。鴨台観音は、学生の皆さんを中心に関員や職員、ご父母の方々や鴨台会の同窓生の方々、さらには大正大学にかかわるあらゆる方々にとっての心のよりどころであり、それぞれの思いを集め寄せるところである。

本学は現在、「地域と共に歩む大正大学」を高く掲げて地域連携型の大学を強く志向している。大正大学のキャンパスの中へ、地域の方々をはじめとする大勢の人々を温かく迎え入れたい。学生の皆さんと教職員も一緒にになって、地域の中に積極的に歩

み出て交わり合い、溶け込ませていただきて、地域の人々との心を結び合い、心を繋ぎ合いたい。とりわけ、学生の皆さんのが地域の人々と共に語り合い、共に思い合い、生き生きとれ合うことができるような社会人としての正しい成長を願っているのである。鴨台観音は、そのような大正大学の営みを温かく、やさしく見守っているのである。

鴨台観音を敬い慕って、私の大正大学での生活がある。私は毎日、鴨台観音へお参りするために大正大学へ通う。そして大正大学の 5 千人の学生の皆さんのが、元気で明るく楽しい学生生活を過ごしてくださることを心から祈り願うのである。そしてま

た、教員と職員が心から一緒になって、手を取り合って一致協力し、さらにさらに「学生中心の大正大学」の正しい実現のために、一生懸命に取り組むことができるよう、心から祈り願うのである。

明るい大正大学の開かれたキャンパスの中で、4 学部 10 学科 21 コースのそれぞれの学生が主体的に学び修めて、多くのものを身につけることができますように…。大正大学の地域連携を含めた社会貢献の取り組みの中に、学生も元気いっぱい、笑顔いっぱいで積極的に参加して、社会人力、すなわち大正大学における「人柄力」を身につけることができますように…。

さざえ堂だより

さざえ堂で初詣で

さざえ堂の新年は 1 月 1 日から始まりました。大学は 1 月 6 日が開講日でしたが、一昨年 5 月の落慶から着実に地域の交流の場となってきたさざえ堂には、初詣でに来られる方々がいらっしゃいます。そのため、元日から職員と学生スタッフが出勤し、気持



ちよく参拝していただけるよう、対応をさせていただきました。

昨年も元日から多くの参拝の方が見えましたが、今年はさらに初詣らしさを感じていただこうと、絵馬とおみくじを用意しました。願いが書かれた絵馬は、さざえ堂前広場にある「多幸鎮」の柵に結んでいただいている。傾向として、やはり受験に効果アリといわれる多幸鎮だけあって、合格祈願を書かれる方が多いようでした。また、おみくじとして用意した「まゆだまみくじ」は南三陸で作られているもので、カラフルな繭玉を開けると、その中

におみくじが入っています。家族分といって 5 つお求めになる方もいらっしゃいました。4 日までに 500 人近い方がお参りされました。

観音様は今年も巣鴨の街をお見守りくださることでしょう。（O）



区民ひろばで出張仏教講座！

大正大学が位置する豊島区には区内 24 か所に「区民ひろば」があります。「区民ひろば」とは、児童館などの既存施設を小学校区を基本の単位とした地域コミュニティの視点から見直し、地域の多様な活動の拠点として有効に活用できるよう再編したもので、老若男女が気軽に集える「ひろば」となっています。

現在、地域連携・地域貢献のコンセプトのもと豊島区との連携をはかっている地域連携推進部（BSR 推進室はその一部署）では、この「区民ひろば」を地域のみなさんと大学が交流するひとつの接点として活用できな

いかと考えてまいりました。そして、豊島区と親しく話し合いをさせていただくなかで、このたび、「区民ひろば清和第一」において、BSR 推進室が出張仏教講座を行うはこびとなりました。

仏教講座は「仏教の基礎知識」（12/11）、「仏事のいろは」（1/24）、「プチ修行（瞑想）」

（2/21）、「プチ修行（写経）」（3/12）の4回シリーズとなっています。昨年 12 月 11 日に行われた第 1 回講座では、BSR 推進室の高瀬顕功研究員が講師をつとめ、お釈迦様の生涯をたどりながら、仏教の基本的な考えを丁寧に解説しました。

「区民ひろば清和第一」は巣鴨地蔵通り商店街の中ほどに位置し、とげぬき地蔵と目と鼻の先だけあり、仏教に関心のある方が 30 名ほどつめかけ、熱心にメモを取ったり、質疑応答でも積極的に質問をされたりと活気ある第 1 回目の講座となり、幸先のよいスタートとなりました。（O）



研究ノート

自死に向きあう

—自死者追悼法要について②—

1998 年から 14 年連続で、年間の自死者数が 3 万人を超えていましたが、2012 年からは 3 万人以下となっています。とはいっても、2 万 7 千人超の人が自ら命を絶っているわけで、現状は楽観できるものではありません。2013 年の自死者数 2 万 7283 人を単純計算すれば、1 日平均で約 75 人、19 分に 1 人が自死を遂げていることになります。なかでも、東京・神奈川・千葉・埼玉の首都圏 4 県だけで、7,119 人と全国の 4 分の 1 以上を占めています。

そして、忘れてはならないのは、自死者一人一人に遺された家族や友人がいるということです。1 人の自死に対して深刻な精神的ダメージを受ける人は 5 人から 6 人と言われていますので、毎年およそ 15 万人の自死遺族が生まれていることになります。そのなかには、血縁の家族だけではなく、恋人や親友、同僚もいることでしょう。そのため、「自死遺族」というと、深い衝撃を受けた人であれば、親族に限らずに用いることが多いようです。

自殺って言えなかった。

自死遺族の思いを「沈黙の悲しみ」とよぶことがあります。それは「家族を自殺で亡くした」と口にすることができず、誰にも苦しさを語れずにいる状態です。

2002 年、一冊の本が出版されました。『自殺って言えなかった。』と題したこの本は、遺児を中心とした自死遺族たちの手記から成ります。本書は、2000 年にあしなが育英会の奨学生

の自死遺児たちが発行した『自殺って言えなかった』という小冊子がもとになっています。さらに、そこに関わった自死遺児たちは、2001 年 12 月には、顔と名前を公表して、時の小泉首相に自殺対策の陳情を行いました。

それまでは、自死という個人の問題とされ、自死遺族という存在も意識されることはほとんどありませんでしたが、遺児たちの勇気ある行動によって、やっと自死が社会全体で取り組むべき問題として認識され、自死遺族の心情が多くの人たちに知られるようになったのです。

『自殺って言えなかった。』というタイトルには、自死遺族の「沈黙の悲しみ」が表現されています。本書におさめられた手記には、遺児の集いで本当のことが言えずに「父は事故で死にました」と嘘をつかざるをえなかった話、夫を亡くした女性が子供たちに死因を話せずにいる苦しさなどが綴られています。



『自殺って言えなかった。』(サンマーク出版)

自死を言えない背景には、自死に対する社会の誤解や偏見、無関心といったものがあげられます。こうした誰にも言えないという状況が、さらに苦しみ・悲しみが増すことにつながってしまっています。

自死遺族のさまざまな反応

沈黙の悲しみのほかにも、自死遺族にはさまざまな反応が生じるといいます。高橋祥友・福間詳編『自殺のポストベンション 遺された人々への心のケア』(医学書院、2004 年) に次の 10 の反応が示されています。

- ①身体的な症状…不眠、食欲不振、動悸、過呼吸など。
 - ②さまざまな形の「なぜ」…「なぜ死んでしまったのか」、「なぜ家族のことを考えてくれなかったのか」などの疑問が次々にわいてくる。
 - ③自責感・無力感・自信喪失…「自分が死においやったのではないか」、「何もしてあげられなかった」、「こんな罪深い私は幸せになってはいけない」など。
 - ④不安・恐怖感…現場の近くにいけない、遺影を見られない、「どうやって生きていけばよいのか」など。
 - ⑤怒り・イライラ…自死者、自死者の同僚や主治医、時に遺族自身に対してもわき起ることもある。
 - ⑥自死した人のことばかり考える…「何を思っていたらいいか」、「今も苦しんでいるのではないか」など。
 - ⑦抑うつ…気力・集中力の低下、不安、希死念慮など。
 - ⑧回避・隠蔽…自死を考えないようにする、亡き人の話題を避ける、など。
 - ⑨安堵感・救済感…長期闘病により本人も遺族も疲弊していた場合などに起こりうる。
 - ⑩記念日反応（命日反応）…命日や誕生日が近づいたり、似た人を見かけると悲嘆がよみがえる。
- これら自死遺族に生じる反応について、もう少し詳しく論じてみたいと思います。(O)

BSR 図書室

池上 彰

『池上 彰と考える、仏教って何ですか？』【文庫版】

(飛鳥新社、2014 年、556 円+税)

ご存知のとおり著者は、元 NHK の記者・ニュースキャスターで、優しい口調でのわかり易い解説でテレビ、新聞、雑誌などに引っ張りだこの、今最も人気のある解説者一人です。その著者が取材で世界を飛びまわっていた時、目の当たりにした宗教に関連した社会現象から宗教について考え、その延長線上で「日本=仏教国」という認識のもと、仏教国・日本に住む私たちが、せめてこの程度は仏教について知っておきたい、と書かれたのが本書です。

まず、第一章「仏教って何ですか？」では、単なる仏教概論ではなく様々な切り口からとらえ、わかり易い言葉で解説しています。批判的な部分もありますが、著者の仏教への期待も読み取れます。次に第二章「仏教発祥の地インドへ。—ダライ・ラマ法王との対談」では、その期待に応えてくれる人物としてあげたダライ・ラマ法王との対談を紹介しています。そして第三章「仏教で



人は救われるのか？ 一日本人にとっての仏教とは？」では、「科学的な態度の仏教」、「心のはたらきや制御法」、そして「死」をキーワードとして仏教の可能性について言及しています。

特に「死」については、「死者を弔うことに特化して教えがかすんでいる日本の仏教」と批判しながらも、より良く生きるために「死」と向き合う必要があり、一つの例として生前に「戒名」を考えることで今やるべきことが見えてくるとまとめています。

「仏教を知ることは、己を知ること、そして、日本を知ることです。」が本書のテーマです。社会の人々に強い影響力を持つ著者が仏教への期待とともに著した本書は、寺院が、僧侶が何をすべきかを考えるきっかけになる一冊です。 (M)

今後の予定

1月 21 日 (水)	15 時 30 分～	第 2 回法然上人御忌会	礼拝堂
-------------	------------	--------------	-----

* 主催=大正大学杏葉会

1月 24 日 (土)	11 時～12 時	花会式（真言宗智山派）	鴨台観音堂前
	9 時～13 時	あさ市	南門 けやき広場

2月 21 日 (土)	11 時～12 時	花会式（浄土宗）	鴨台観音堂前
	9 時～13 時	あさ市	南門 けやき広場

